

女子大生における親の子育て経験の聞き取りについての一考察

Female college students' experience of listening to their parents' talk about parental care

串崎 幸代¹

要 旨

親の子育て経験を聴く体験が女子大生にどのような心理的影響を与えたか、自由記述された内容を整理したところ、①過去の明確化、②被受容感の強化、③親とのつながりの認識、④親イメージのとらえ直し、⑤親への感謝、⑥子育てイメージの具体化・変化、⑦未来への展望・関心のひろがり、⑧新たな問題意識、という側面がみられた。親の子育て経験を聴く体験は女子青年のアイデンティティの感覚を強め、世代の流れに自己を位置づけるきっかけとなるのではないかと考察した。

キーワード：子育て raising children, アイデンティティ identity, 青年期 adolescence

はじめに

青年期は、親から自立し、「自分は何者であるか」「自分らしさとはどういうことか」というアイデンティティの模索が行われる時期であるとされる (Erikson, 1950/1963)¹⁾。親に対して盲目的に反抗していた青年も、青年期後期に入ると、親に対して客観的な目を向けるようになり、親を一人の大人として見、以前よりも対等な立場で関わる事ができるようになるという (松井・釜野, 1996)²⁾。筆者 (2005) は以前、親の人生について聴く体験が大学生に与える心理的影響について考察し、「新たな視点の獲得」「自己の位置づけの明確化と時間的展望の広がり」「つながりの再確認と存在基盤の安定化」という側面が青年期の自立のプロセスと時間的展望の広がりを促進するのではないかと考察した³⁾。

両親は自分自身の親であり養育者であり先輩であり、肯定的・否定的、意識的・無意識的など、さまざまな面で青年のモデルとなりやすい。身近であるがゆえに葛藤的にもなりやすい存在であるが、自らの記憶にない自分の過去を、親という立場から語られる語りを聴く体験は、青年にとって意味ある体験であると推測できる。本論では親から自分を産み育てた経験についての聞き取りが女子青年にとってどのような体験であるか、また、それがどのような心理的意味を持つかについて、考察したい。

方法

筆者が講義を担当した千里金蘭大学児童学科の授業 (1年生後期配当) を履修していた大学生に対して、自分の親 (父か母、または両親) に聞き取り (インタビュー) を行いレポートを提出させた。児童学科には保育士や幼稚園教諭、小学校教諭を目指す学生が在籍している。

聞き取りの実施期間は2007年12月~2008年1月であった。聞き取りの内容には、①子どもが生まれたときの思い、②これまでの子育てで印象に残っていること、③子どもをどのように育てようと思ってきたか、子育てで工夫した点、④子育てで苦労した (難しかった) 点、⑤子育てをしていて嬉しかったこと、⑥子育ては親にとってどのような経験だったかを含むよう指示し、後は自由に話を展開させて良いことにした。最後に聞き取りを行った経験や聞き取りから得られた回答について大学生自身の考察や感想を書くように求めた。レポートは単位取得のための条件であった。

1 Yukiyo KUSHIZAKI 千里金蘭大学生生活科学部児童学科 (受理日: 2008年10月1日)

結果と考察

本論では、親が語った内容そのものについての検討ではなく、親の養育経験について聴く体験が女子大生に与えた影響について考察するため、聴き取りの手続きが適正で、学生の考察や感想が欠落していない50名のレポートを対象に考察を行う。

（1）聴き取り体験による心理的影響

レポートへの記述内容を整理したところ、主に次の①～⑧に分類された。（ ）に示された人数は、それに関する記述を行った学生の数である。なお、文中の『 』にレポートにおける具体的な記述を紹介する。〔 〕は筆者による注である。

① 過去の明確化（15例）

私たちは自らの誕生や幼少期のことは記憶していない。また、それ以降の記憶もあいまいなことが多い。しかし、親の口から自らの誕生や幼少期の体験について語られるのを聞くことで、自らの人生がスタートした時期のエピソードを知ることができる。以下に学生の記述を紹介する。

『このインタビューを通して、私の記憶にない育ちが少し見えたように思います』

『今になってこのレポートを書くことによって、自分の覚えていない過去を知ることができて少し楽しかったしお母さんの本音みたいなものも聞くことができたので、よかったです』

また、今はもう忘れてしまった子ども時代の感覚や体験を思い出した者もあった。

『母から自分の話を聞いて、自分の幼いときの記憶が思い出された。幼い時の私は、なんて無謀で無茶なことをするのだろうと思ったが、一方で、幼い私の方が度胸はとても大きいように思えた。そして、子どもの世界の見え方が、何もかも大きいことを思い出せたような気がする。〔略〕子育てのことだけでなく、自分の幼かった頃の話聞く事ができてよかったと思った』

自分の過去がリアリティを伴って自分の人生に再度組み込まれた体験といえるだろう。

② 被受容感の強化（34例）

親から自分の記憶にない幼いころの体験を聴くということは、自分の人生の始まりを約20年という歳月を経て今もなお記憶している人がいることを意味する。今回のレポートでは、ほとんどすべての親が子どもの誕生や成長に喜びを感じていたことが語られた。また付加的に、きょうだいや祖父母、親戚が誕生を喜んだというエピソードが語られる例もあった。そして、大学生は自分が愛されているという感覚や望まれて生まれたという幸福感を体験していた。

『母が、「子育ては大変やけど、本当に幸せ。」と言ってくれたことが、とても印象的でした。私は親に迷惑ばかり掛けてしまったけれども、幸せだと感じてくれていることに感激しました』

『私はそれ〔妊娠を知ってとても嬉しかったことを〕を聞いてとても嬉しく思い、生まれてきて良かったと改めて思いました』

『初めて立った日を詳しく覚えていてくれた。私はそれがすごく嬉しかった』

『インタビューをしてみて私は驚きの連続でした。私が生まれたことで姉がそこまで喜んでくれたなんて知らなかったし、両親が私のことをここまで考えて育ててくれてたなんて知らなかったです。それに、父や母そして家族から望まれて生まれてきた子なのだと感じとれてとてもよかったです』

『子どもは大人になるにつれて幼い頃の記憶がどんどん薄れていきますが、親は鮮明に覚えていてくれました。今は当たり前のように毎日生活しているけれど、これも両親やきょうだい、周りの方々から支えてもらっているから生活できているのだと思いました』

③ 親とのつながりの認識 (12例)

これは、「親がいて、その親がこのような育ててくれたから、今の自分がある」という気づきについての記述である。今回のレポートでは、そのことがおおむね肯定的に受け止められていた。

『自由に育ててくれたおかげで、今のような個性豊かな姉妹になれたのだと思います』

『私は母親から幼い頃にちゃんと、良くないことは良くない、良いことは良い、とはっきり叱るところはしかってもらえた事が、今の私に深くつながっているとと思いました』

『この父で、この母でなければ、今の私は存在していなかったし、本当に父母に感謝しています』

『〔子育てで工夫した点について〕母は「自分がされていやなことは人にもしないようにする子に育てた」という。私はこれを聞いてとても驚きました。なぜかという、私のモットーは「自分がされていやなことは人には絶対しない！」まさに母が言っていた通りのことだったので』

『しつけに関しては厳しい方だったと思います。その頃は「なんで？」と思うばかりでしたが、今となっては「あの頃やっていてよかった・・・」と思うし、二人に育てられてきて良かったと改めて思いました』

現在の自分自身の価値観やありようが、親の育て方の影響を受けていることへの自覚に関する記述といえよう。

④ 親イメージのとらえ直し (6例)

子育てに対する親の気持ちや考え、経験を聞くことにより、これまで知らなかった親の一面を知り、これまでとは違った視点から親を見るようになったという変化である。また、苦勞した親の気持ちを推し量る記述もみられた。

『インタビューで答えてくれたようなことを思って私を育ててくれたのだと感じ、違う見方で両親を見られるようになりました。自分の性格も、考え方も、両親がいる環境で培われたもので、親というものは凄いのだと改めて感じました』

『こんな辛い経験〔流産〕もしていたのだなと思うと、私は昔勉強で辛いと思っていたけど、そんなの大したことがないなと感じました。お母さんは、もっと辛かったのだなと思うと胸がいっぱいです』

『私も昔も最近でもたまに親のことをうっとうしいと思っていたことがありますが、本当は私達のことを思って言ってくれていること、きちんと理由があって言っているのだ、ということを知ることができたので、両親の気持ちを踏みにじるような行動はしたくないし、うっとうしいと思わないようにしようと自分の言動について考え直すことが出来ました』

『私が登校拒否になっている時、お母さんは特に私に何も言いませんでした。けれどそれは言わなかったんじゃないかと悩んでいたからだったんだなと知った』

『わたしはずっと、4人の子どもをこんなに大きくなるまで育てるまで、母は想像できないくらいたくさんの苦勞をしたのだらうなとばかり思っていました。でも実際は、母はとても子育てを楽しんでいたようで驚きました。それはきっと、母が私達子どもに多くのことを要求しなかったからだと言話を聞いて感じました』

⑤ 親への感謝 (27例)

これは、これまで育ててくれた親の養育や愛情に感謝の気持ちを感じ、親孝行をしたいと思うという記述であり、多くみられた。これからの自分の人生を頑張り、夢をかなえることによって親孝行したいと奮起する気持ちも語られた。

『今回、お母さんに聞いてみて、子育ての大変さとか難しさをいろいろと聞いて、わたしもここまで育ててくれたことを親に感謝しないとイケないなあと思いました』

『これからは両親に恩返しをしてあげたいなと考えています。〔略〕有難うございますという気持ちでいっぱいです』

『苦勞かけた分、自分の力で自立できるようになれば、父や母に楽をさせてあげたいと思っています。今私にできることは、しっかり勉強して、夢を実現させることが一番の親孝行だと思うので、精一杯努力していきます。また実家に帰った時は、家事をしたり、色んな会話もしたいと考えています』

『あらためてお母さんに大事にされていると実感させられ、お母さんが自慢できるような娘になれるようにこれか

らも成長していきたいと思いました』

『これからも迷惑をいっぱいかけると思うけれど一生懸命頑張っていこうと思います。また、働けるようになったら今まで苦労させた分、嬉しいことや楽しい事をいっぱいしてあげられるといいなと思います。そしてこれからは私のできるかぎり母を家事やいろんなことで助けたいです』

⑥ 子育てイメージの具体化・変化（21例）

子育ての実体験の話聞いて、学生がこれまで持っていた子どもや子育てに対するイメージが具体化したり変化したりしていた。「子育ては大変だ」という気づきも「子育ては楽しい」という気づきもどちらも見られた。どのような気づきになるかは、幼い時の自分（子ども）の様子、母親の体験のありようや、親の語り方、学生の持っていたこれまでの子育てに関するイメージによって、異なっていた。

『子育てと一口に言ってもすごく難しいんだなと感じました。自分より、父より、母より、まず第一に自分の腹を痛めて産んだ子を一番に考え行動しないといけないし、なおかつ自分の生活もやりくりしていかなければならないという非常に難しいことだと感じました。ただ、「子どもが欲しい」という考えだけでは私の母のように子育ては絶対に出来ないと思いました。なぜなら、責任と義務が生じてくるからです』

『今回の話を聞いて子育てがいかに大変であるかを知った。[略] 親が、子どものためにと考えてしていることも、子どもは気付かずにいろいろなところを駆け回るのだろう。そんな時にも、親は、子どもを見守るのだと思うと、親とは、すごいと思った』

『子どもを育てるということは並大抵の気持ちじゃ絶対に無理だし、かわいいだけでも育てられないという事が伝わってきました』

『母はわりと気持ちをラクにして子育てに臨んでいたようです。いい母親になろうとか、いい子に育てようとか、変なものさしを勝手につくらずに、ラクに向き合っていく事が親にとっても子どもにとってもいいのではないかなと思いました』

『子育ては、ただ単に子どもを育てるだけではなく、自分の周りの環境も全て変わってしまう人生の一大事だと思う。そしてそれを乗り越えてくれたのも子どもの力だと思う』

また、親の子育てのエピソードから、子育てに必要な条件について、新たな理解も報告された。

『両親の話聴いて、子育てに必要なことは、まず親からの愛情が必要であり、また、夫婦の場合は二人の子育てに向ける思いや考えを一致させておくということが大切だと思いました』

『子育てには夫婦間の支え合いがとても重要だとわかってよかったです』

『子育てには環境は大事なものだと感じた』

『親も同じように、今までに誰からも教えてもらうことのなかった大切なものを [子どもから] 教えてもらって、親として育っていくのだと思いました』

⑦ 未来への展望・関心のひろがり（26例）

女子大学生は、将来、自らも出産や子育てを経験する可能性が高い。母親の子育て体験をモデルに、自分も将来母親のように子育てをしたいという気持ちや、出産育児を楽しみにする期待感が語られた。また、将来母親と同じように自分も大変な育児をできるだろうかという不安な気持ち、自分が子どもを産めばもっと親の気持ちがわかるようになるのではないかとといった推測も記述された。

『私がお母さんになる時もこんな風に思うのかなぁと感じました。子どもが生まれた瞬間「お母さん」と呼ぶ人間ができたってことだから、自分がその立場だったらうれしいだろうなと思いました』

『私も将来子どもが生まれたら、私の親のように子どもにいろいろな思いを持ってそだてるんだろうなあとか、親が私にしてくれたように子どもにたくさんの経験をさせてあげたいなあとか、将来の想像をしました』

『今の私にはわからないけれど、いつか私にも子どもができて子育てをするときに、子どもは「親の鏡」と、母と同じように思える日が来るのかなと思うと今から楽しみです。そして、私も母に子育てのアドバイスをしてもらえればいいなと思いました』

『自分が親になったときに、親の苦労を身をもって知ることになり、心の底から両親に感謝できるのかなと私は思いました』

『今まで子育てはめんどくさそうという気持ちが私の中にはあったし、今も完全になくなったわけではない。でもやはり母親になると自然と子育ては苦じゃなくなっていくのかなと少し思った』

『親がわたしを育ててくれたように私も将来自分に子どもができたならこのように育てられるかは不安です。母は、決してお母さんの育て方が一番良いとも限らないからともいっていました。でも、わたしは、父や、母のようにその子の個性を伸ばしてあげられることは大事だなと思いました』

⑧ 新たな問題意識（4例）

親による子育ての体験を聴き、自らの被養育体験を振り返るなかで、子どもや子育てに対する新たな問題意識を持つ者も4例ではあるが見られた。

『虐待などの勉強をしていて、母の話を知ったら“何で？何で虐待とかになるん？”とすごく思います。自分がお腹を痛めて産んだ子、自分の分身のようだと母が言っているように何よりも大事な子どもになぜそういうことが出来るのかと思っただけで悲しいです。改めて、虐待のはなしや虐待をしてしまう親のはなしなどを聞いて勉強していきたいなと思いました』

『幸い私は、このように恵まれた環境で生まれる事が出来たので良かったけれど、望まれないで生まれてきた子ども、生まれた時に心の底から喜んでもらえなかった子どもたちはどんな気持ちでいるのだろう、という考えも生まれました』

『私も将来そんな〔子どもに愛情をかける〕お母さんになりたいと思ったし、お母さんが育児ノイローゼになりかけたことにも驚き、育児ノイローゼなどの育児の問題は身近にあるんだなと感じた。そんなお母さん達を少しでも助けてあげられるようにもっと育児についての知識を増やしたいと思った』

『これから子どもにかかわる仕事に就こうとしているということは、自分自身も子育てする親の気持ちも考えなくてはならないと感じました。これからも親と話す機会をたくさん設けたいと思います』

(2) 聴き取り体験の内的な意味について

上記において、女子大生における親の養育体験の聞き取り体験について、①～⑧の項目を並列的に報告したが、これらは相互に関連しあっていると思われる。親に子育ての話を知って自分の過去が明確化されることによって、彼女たちは受容されている感じや支えられている感じ、つながりの感覚を強めているように思われた。また、子育てイメージの明確化・変化は、親イメージの捉え直し（新たな視点の獲得）が起こる引き金となっていた。そして、学生たちはそのような親や親の行いに対して感謝の念を持ち、将来へ向けて奮起していた。自分自身とは異なる養育体験を持つ子どもへの問題意識が引き起こされることもあったが、これらは今後の関心へとつながっていた。また、親の子育て体験を聴くことにより、自らが将来に類似の経験をたどるであろうという展望が自然と描かれていた。

私達には人生の最初期の記憶がない。その経験を親の視点から語られることは、自らの歴史（ライフヒストリー）を明らかにし、自分自身の過去を自分のものとして所有するきっかけとなる。そしてそのことによって、私たちは過去の自分自身とのつながりを取り戻したり、今の自分は過去の自分の上に成り立っているという、一貫した自分という感覚（アイデンティティの感覚）を感じることが出来るのではないだろうか。国眼・福原（1994）は Erikson のアイデンティティについての説明の中で以下のように述べている。

エリクソン（1950）によれば、「これこそが自分である」というこの「自分らしさ」の感覚は、自分はいかなる他者とも異なる独自の見方や行動様式をもつ存在であり、今ここにいる自分は過去から現在そして未来にいたるまで一貫して同じ自分であり続けるという感覚である。別の言い方をすれば、「育てられてきた自分」「これから生きていきたい自分」「他者や社会から期待される自分」という三者を認め、それらを統合することで達成される感覚である。（略）それは過去を自分が立つ根として受け入れ、充実した樹木となるように、将来に向け枝葉を剪定す

る過程とでもたとえることができようか。⁴⁾

自分の過去についての語りを聴くという経験は、「今ここにいる自分は過去から現在そして未来にいたるまで一貫して同じ自分であり続けるという感覚」を育て、「過去を自分が立つ根として受け入れ」ることを促進するように思われる。また、自分のなかに親の価値観や養育方針が根付いていることを認識する体験もまた、世代をまたいで今の自分自身の内的な由来を意識する体験であるといえよう。このような体験は、「私はどこから来たのか」という出自への理解を助け、ともすれば葛藤的になりやすい青年期を生きる支えや助けとなりうるように思われる。青年はそれを土台に、自分らしさを作っていくことができるであろう。「自分の過去を知る」という体験は、これからの将来の自分を築く安定した土台につながるように思われる。

また、自分自身の人生のスタートを待ち望み、喜びを持って迎えた人がいたという気づきは、自分の存在が受け入れられているという実感を引き起こしていた。愛着理論の視点から考えれば、このような親や家族など身近な人に愛されている、受容され、支えられているという気づきと実感は、ひいては自分自身がこの世の中に受け入れられている、自分はここにいていいんだ、という基本的な信頼感や安心感の強化につながっていくと考えられる。

さらに、一世代前の親世代の考え方やありようを自分自身も引き継いでいるという自覚は、今度はそれを自分の子どもにも引き継いでいくという感覚を自然に育てると思われる。子育ての話は、子育てのイメージを具体的に描き出し、母親になるということの現実感をもたせるであろう。今回の対象者は児童学科の学生であったため、自分が母親になるという将来展望が比較的 naturally 描かれたように感じられた。母親になることに楽しみと不安の両方が沸き起こるのは自然なことであると思われる。

やまだ (2000) は、「人は直接に同じ経験をしなかった人に語りかけることによって、相手を『経験の共有者』に変える事ができる」⁵⁾ と述べ、「人生を物語るこの意味は、経験をどのように、次の世代、将来の世代に語りついでいくかという教育の問題として立ち現れ」⁵⁾ と指摘している。親世代からみれば、自分の子育ての経験を子どもに語ることは、自分の生き方を次世代に伝え、教え、継承する機会となる。どのように語り、どのように受けとめられるかは、語り手と聞き手の関係性や相互作用に大きな影響を受ける。そして、受け手である青年たちはその経験を受け取り、未来への関心、展望へとつなげていくことが可能となるであろう。もちろん、青年にとって、親から自分、自分から子どもというつながりが喜ばしい場合もあれば、束縛に感じられることもあるだろう。青年は自らの被養育体験を見直すことによって、親の良い面は引継ぎ、否定的な面は無意識的になぞるのではなく自覚的に変化させていくことができる。

このように、親から自分の物語を聴く体験は、青年に自分自身に新しい最早期の物語りを獲得するひとつのきっかけを提供するであろう。ただし、親から語られる話は「親自身が記憶している体験を子どもに語る」という状況の中で語られた物語である。それがどのように語られるかは、親子の関係性と親が何を子どもにどのように伝えたいと思うかの影響を受けている。話を聴くという体験がどのような内的意味を持ちうるかは、子どもがそれをどのように受け止めるか、という受け手の要因も働いている。

まとめ

以上、親の養育体験の聞き取りが、女子大学生にとってどのような内的体験であるかについて考察を行った。他者の視点から自らの育ちについて語られる体験は、青年に自分はどこから来たのかということの理解を促し、「私はこういう者である」というアイデンティティの感覚を意識させるのではないかと、そして、もしそういう私が親や身近な人々に大切に思われて来たのだという気づきが得られた場合は安心感が強まるのではないかと考察した。また、両親とのつながりの感覚、将来への展望は、自らを親-自分-子という世代の流れのなかに自分自身を位置づける体験となると思われる。今回、8つの観点で整理したが、これらが相互にどのような関係にあるかを明確にするには、数量的なデータも用いての検討が必要であると思われる。

文献

- 1) Erikson, E.H. 1950・1963 *Childhood and Society*. W.W.Norton, New York.
- 2) 松井仁・釜野明子 1996 「心理的離乳の学年」日本教育心理学会第38回発表論文集94
- 3) 串崎幸代 2005 「親の人生について聴く体験が青年に与える心理的影響について」臨床心理研究—京都文教大学心理臨床センター紀要—第7号
- 4) 国眼眞理子・福原久美 1994 「女性らしさと自分らしさの間で—青年期」岡本祐子・松下美知子編『女性のためのライフサイクル心理学』福村出版 91-131
- 5) やまだようこ 2000 「人生を物語ることの意味」やまだようこ編著『人生を物語る—生成のライフストーリー—』ミネルヴァ書房 1-38

